

國學院大學学術情報リポジトリ

敷石住居の出現期の様相：甲信地域を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫛原, 功一, Kushihara, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000426

敷石住居の出現期の様相

― 甲信地域を中心に ―

榑 原 功 一

I はじめに

縄文中期末に出現・普及した敷石住居は、柄鏡形で敷石を付設した住居形態を典型とし、「柄鏡形敷石住居」と呼ばれる。しかし地域的には必ずしも敷石がないことから、今日「柄鏡形（敷石）住居址」と表記されている。これは敷石住居研究の第一人者、山本暉久氏が提唱した呼称名（山本一九八二）で、柄鏡形住居と敷石との関係性を捉えた関係性の認識といえる。この点に関し、本稿で取り上げる甲信地域（山梨・長野県域）では、敷石住居の出現段階に柄部がない事例があり、筆者は「柄のない敷石住居」として注目したが（榑原二〇〇四a）、甲信地域の視点からすれば「（柄鏡形）敷石住居」と換言してもよいだろう。

この種の遺構が通常の住居かどうかについては久しく議論されてきたところで、建物の機能分化が曖昧とみられる縄文時代では建築物全般を広く住居と捉え、「住居」と呼ぶことにとくに異論はない。学史的にみれば縄文時代の住居の一形式として堅穴住居、平地住居、洞穴住居とともに「敷石住居」が早い段階で区別、認識されてきたが、一方で柄部の存在に注目した「柄鏡形住居」という呼称が登場すると、その性格や出現経緯を巡って村田文夫氏、山本暉久

氏らを軸に研究が深められてきた。個々の事例に即して「柄鏡形住居」「敷石住居」「柄鏡形敷石住居」と使い分けるのがよいと思われる一方で、それらを総称する名称もまた必要となる。ここでは語弊もあるが「柄鏡形敷石住居」としておく。

柄鏡形敷石住居に関しては様々な課題が依然として内在するなかで、柄部・敷石の出現過程の解明が最大の課題となっているが、本稿では甲信地域各地の中期末の事例をあげ、敷石住居の発生、柄鏡形敷石住居の出現過程について検討する。とりわけ甲信地域の視点として敷石と柄部の出現系譜が異なるのではないか、という点について検討したい。

以前、本橋恵美子氏は「敷石住居の出自については柄鏡形敷石住居址とは発生を異にするものであり、前者は中部山地の曾利式土器圏に、後者は加曾利E式土器分布圏に存在する住居形態」で、「敷石住居址は曾利Ⅱ式段階に竪穴住居内の部分敷石として発生し、柄鏡形住居址は加曾利E3式新段階に柄鏡形敷石住居址として成立する可能性が高い」という重要な指摘をしたが（本橋一九九五）、それに対し山本暉久氏は「より説得力ある説明と資料の提示が必要」と述べた（山本一九九九）。その後、筆者が山梨県内の柄のない敷石住居の事例を提示すると、山本氏は敷石が「中期終末期より古い段階に成立していた」とし、「住居内敷石付設は中部高地、もつと地域を絞るなら、（中略）相模川最上流域、山梨県東部の曾利式後半段階に起源したもの」と理解できるかもしれない。」とする見解を示しつつ、「本當に柄部、すなわち張出部がないのかどうか」について疑問を呈すとともに、「より細かな時期対比」の必要性を説いた（山本二〇〇八）。山本氏が指摘するのとおり、柄部の有無に関しては、本来存在したものが欠失した可能性があることは確かである。また時期対比とは、甲信地域では詰まるところ曾利式と加曾利E式土器編年との併行関係を指すものといえ、土器型式の時期認定如何で遺構の時期認定が大きく左右されることから、詳細で確かな土器編年の整備が

必要であるとともに、出土土器から時期認定を行う難しさが遺構研究には常に伴うことを肝に銘じておきたい。

Ⅱ 柄鏡形敷石住居の革新性

甲信地域で縄文中期末に出現、普及する柄鏡形敷石住居の特徴として、中期後半の竪穴住居と比較すると、住居の構造・立地上の変化について以下の諸点があげられる。

(一) 敷石の敷設 縄文中期末までに敷石が出現する。山本氏は敷石の起源を中期後半の石壇・石柱や炉周辺の部分的な敷石に求めるが(山本一九七六)、敷石出現は突発的で、石壇・石柱からの漸移的な発展形態ではないとする見解が多い(石井一九九八・佐野二〇〇三ほか)。

(二) 柄部の付設 柄鏡形住居は柄部の存在を最大の特徴とし、山本氏は埋甕埋設のための小張出が発達して柄部が成立したと考えるが(山本一九七六)、発展過程における中間形態がないことから異論がある(本橋一九九五ほか)。

(三) 平地式または浅い竪穴へ 中期後半に竪穴が浅くなる現象があり、とくに敷石住居では竪穴の掘り込みを検出できない事例も多く、平地式として捉えられる事例がある。

(四) 主柱穴から壁柱穴への変化 中期後半での四～五本主柱を基本形とした柱穴配置から、壁際に多数の柱穴を巡らせた壁柱穴へと変化する。

(五) 連結部における対ピットの存在 柄部と主体部の間には、狭い間隔で二本の柱穴(対ピット)が配置される。

(六) 柄部の石組遺構の存在 出現期の中期末には、柄部に長方形の石組(配石)や土坑をもつ例がある。埋甕埋設の場でもあることから、それに類した性格が考えられるが、これに関する先行研究はほとんどないようである。⁽¹⁾

(七) 炉の位置の変化 中期後半の竪穴住居では奥壁寄りにあった石囲炉が、柄鏡形敷石住居では次第に中央もしくはやや手前に配置されるようになる。屋根の煙出しの位置が次第に中心に寄ったものと考えられ、上屋構造の変化を伴うとみられる。

(八) 縁石、周礫帯の存在 主体部壁際に柱穴をつなぐように礫を並べ(縁石)、あるいは多数の小礫を带状に配置した事例(周礫帯)をもつものがある。壁構造もしくは壁の基礎構築に関わるとみる見解(末木二〇〇六ほか)、廃屋儀礼に伴う行為とする説がある(山本二〇〇二)。また縁石、周礫帯の出現と代わるように柄鏡形敷石住居では周溝を欠失する。

(九) 立地の変化 中期後半では竪穴住居は台地面上に集落を構えるのが普通だが、中期末以降は台地縁辺や谷部などへの立地例が増える。植物利用など生業と居住域との関連性が考えられている(櫛原一九九九ほか)。

(十) 主軸方向の変化 中期後半の竪穴住居では南向きを基本とし、方位を意識した構築とみられるが、柄鏡形住居の主軸方向は傾斜面下方を向き、方位を無視した事例がある。立地の変化とともに柄鏡形住居の掘り込み面が浅くなることから、雨水浸入に対する対策と考えられる。それまでの方位への意識からすれば、従来の世界観を変える現象と捉えることもできる。

このように住居、集落に関わるさまざまな点が変化をみせることから、柄鏡形敷石住居の出現期をもって伝統的な竪穴住居を伴う居住形態の転換期と捉えられる一方で、中期後半の竪穴住居の構成要素を継承する点として以下がある。

(十二) 出入口部の埋甕 柄鏡形敷石住居では連結部や柄部、柄部先端に埋甕をもつことがあるが、これは中期後半の出入口部における埋甕祭祀を継承、発展させたものとされる(山本一九七六)。ただし後期に入ると埋甕は甲信地域の

では減少、消滅する。

(十二) 炉形態 中期後半の方形石囲炉の伝統は後期前半以降も引き継がれる。また敷石住居出現期には、奥壁寄りに炉が設ける例が多く、中期後半の竪穴住居における炉の位置を継承したものといえる。

(十三) 主体部の平面プラン 中期末の柄鏡形敷石住居の出現段階では、中期後半の竪穴住居の平面プランや支柱穴構造の柱穴配置を留める事例がある(櫛原一九九五)。

柄鏡形敷石住居の出現については、従来の竪穴住居に敷石を敷設するかたちで発生したと考えられることから、竪穴住居の柱配置、上屋構造などの構成要素を継承しつつ、出入口である柄部構造を伴う新たな上屋構造の波及により、竪穴住居の構造や立地が変化していったという見通しをもつことができる。本稿ではこうした観点により甲信地域の縄文中期末の柄鏡形敷石住居の出現期の様相を検討する。このテーマに関して現状では最も的確に整理された成果として山本氏(二〇〇二・二〇一〇)および石井寛氏(一九九八)の先行研究をあげねばならないが、甲信地域では浅間山麓の様相についての本橋氏(二〇〇〇・二〇〇三)、屋代遺跡群および千曲川水系、犀川水系、諏訪盆地の様相に関しては水沢教子氏(二〇〇二)、山梨県の様相を整理した笠原みゆき氏(一九九九・二〇〇一)の成果など、各地での地域的研究がある。

柄鏡形敷石住居の出現過程に関する分析では、これまで時間的な扱いが粗かった点は否めない。本稿では中期末の事例を扱い、称名寺式期以降の後期柄鏡形敷石住居は対象外とするが、甲信地域の中期後半から後期初頭の土器編年について、現在最も詳細ともいわれる多摩地域を中心⁽²⁾に設定された新地平編年を用い、加曾利E式、曾利式土器編年の併行関係を以下のように措定する(小林・中山・黒尾二〇〇四、櫛原二〇〇八)。

新地平十二a期(加曾利E3古、曾利Ⅲb)、十二b古期(加曾利E3中・曾利Ⅳa)、十二b新期(加曾利E3中、

曾利Ⅳb)、十二c期(加曾利E3新、曾利Ⅴa)、十三a期(加曾利E4古、曾利Ⅴb)、十三b期(加曾利E4新、曾利Ⅴc)、十四a期(称名寺I古)

本稿では、柄鏡と敷石の成立を別系譜と捉え、両者が一体化して柄鏡形敷石住居が出現するという立場をとるが、炉が奥壁寄りにあり、主柱穴配置を留める堅穴を伴う敷石住居を「堅穴系敷石住居」(堅穴系)と呼称し、中期後半の堅穴住居に敷石を敷設した堅穴系譜の敷石住居として理解する。また柄部が付設された敷石住居を「柄鏡形敷石住居」(柄鏡形)、柄部を伴わない敷石住居(柄のない敷石住居)を「非柄鏡形敷石住居」(非柄鏡形)とする。

Ⅲ 各地域の様相

(一) 長野県域(図二〇四)

北信・東信地域にあたる千曲川水系の上・中流域には柄鏡形敷石住居の出現期の事例が多く知られ、それ以外の地域では事例が少ない。とくに諏訪湖盆地以南、南信地域の天竜川、木曾川流域(伊那谷、木曾谷地域)では石壇・石柱遺構の集中地域にありながら、敷石住居発生への系譜性を見出せない状況にある。

屋代遺跡群(千曲市)は、千曲川に近い沖積面の地下四mに埋没した中期後半を主とした集落遺跡で、柄鏡形敷石住居の変遷過程を追うことができる(水沢ほか二〇〇〇、水沢二〇〇二)。出現期にあたる十二b新期に柄鏡形・非柄鏡形の両者が併存する。非柄鏡形のSB五三一八は径三・二mの北東向き円形敷石住居で、奥壁寄りに方形石囲炉があり、その周囲に部分敷石を敷設する。柄鏡形敷石住居のSB五三二五は長さ四・二mの有段式、楕円形主体部中央に方形石囲炉を中心とする敷石があり、柱穴は四隅の壁柱穴のほか対ピットがある。SB五三三六は東向きで、長さ

三・八mの有段式、楕円形主体部の内側に部分的に敷石を敷設し、中央に方形石囲炉、四隅の壁柱穴、対ピットがある。そのほかSB六七〇二は非敷石の南西向き柄鏡形住居で、主体部中央に埋甕炉をもち、壁際に壁柱穴とみられる柱穴が巡り、対ピットをもつ。十二c期では、SB五三一七は南東向き、径三mの非柄鏡形の円形敷石住居で、中央に方形石囲炉、壁際に縁石または部分敷石がある。柄鏡形敷石住居のSB五三二一は逆五角形主体部に柄部をもつ。SB五三三八は南向きで、径五・六mの円形主体部中央に方形石囲炉があり、壁柱穴と対ピットを配す。十三a期はいずれも柄鏡形敷石住居で、SB五三一九は長さ四・三mの方形プラン内に方形に周礫を並べ、炉は中央手前に方形石囲炉がある。SB五三二四は長さ四・七mの逆五角形主体部の左側に柄部があり、周礫を有し、ほぼ中央に方形石囲炉がある。SB五三三七は南東向きで、長さ五・二mの隅丸方形主体部に方形の周礫、部分敷石を

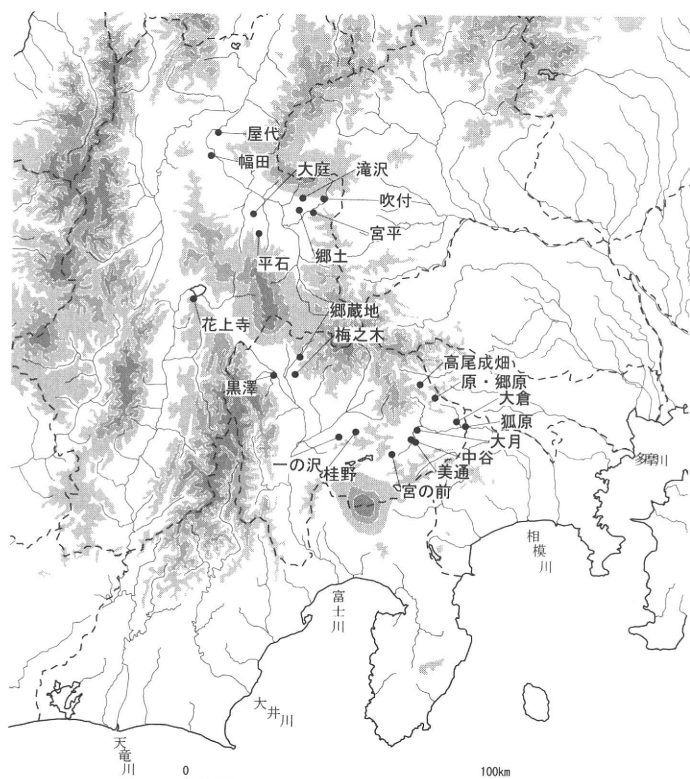


図1 甲信地域の遺跡分布図

長野県域 (屋代遺跡群)

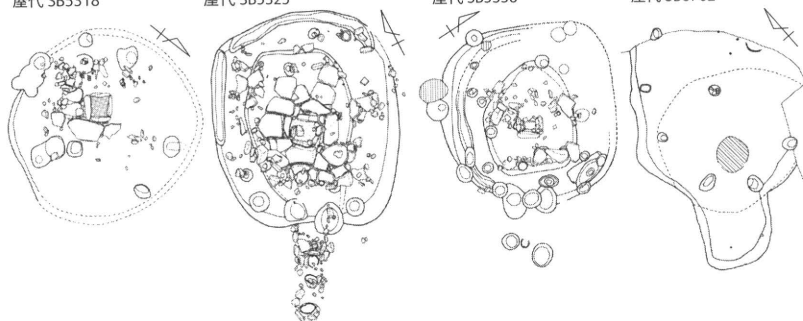
12b 新期

屋代 SB5318

屋代 SB5325

屋代 SB5336

屋代 SB6702

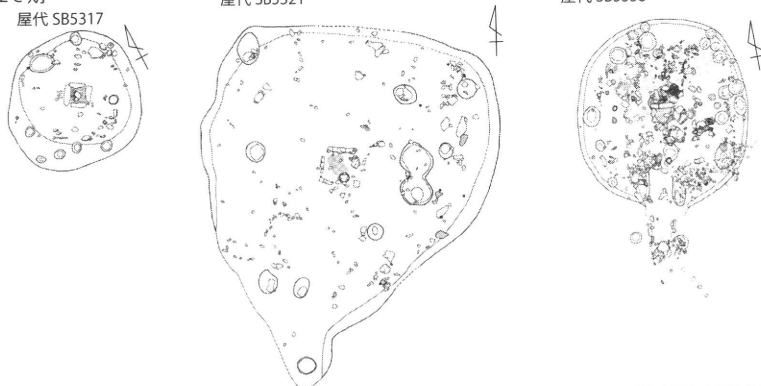


12c 期

屋代 SB5317

屋代 SB5321

屋代 SB5338

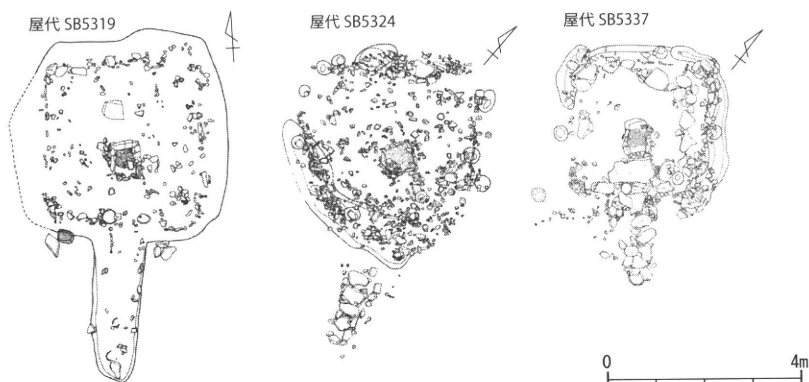


13a 期

屋代 SB5319

屋代 SB5324

屋代 SB5337



0 4m

図2 甲信地域の柄鏡形敷石住居 長野県域 (1)

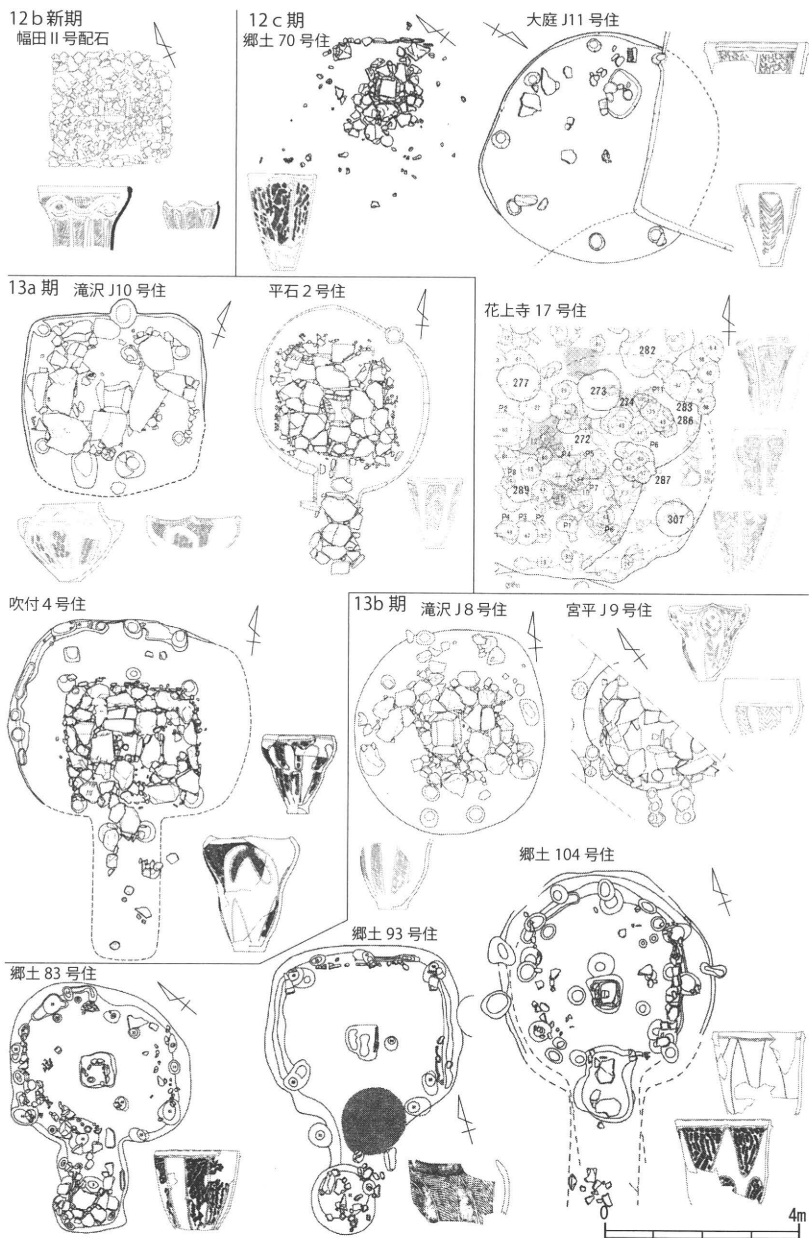


図3 甲信地域の柄鏡形敷石住居 長野県域 (2)

敷設し、中央手前に方形石囲炉がある。四隅の柱穴内には立石を配し、対ピットをもつ。屋代遺跡群に関しては水沢氏の詳細な検討があり、新潟県側の卵形住居の影響下により有段式檜円形主体部の柄鏡形敷石住居が出現したと想定するとともに、在地型もいえる逆五角形竪穴からの柄鏡形住居発生の過程を指摘した。ここでいう逆五角形とは出入口側がホームベース状に発達した平面プランをもつもので、水沢氏は「五角形住居」と呼び、柄鏡形住居出現の初現形態と推定している（水沢二〇〇二）。

長野県域では十二b新期の事例として幅田遺跡（戸倉町）Ⅱ号配石が著名である（森嶋一九八二）。千曲川支流の扇状地面、東向き傾斜面に立地し、Ⅱ号配石は幅二・五mの方形主体部をもつ南向き、非柄鏡形敷石住居で、中央の方形石囲炉を中心に方形敷石がある。

十二c期の事例には郷土遺跡（小諸市、桜井ほか二〇〇〇）がある。浅間山南麓の蛇堀川西側斜面上に位置する中期後半～後期の大集落で、七〇号住は南西向きの非柄鏡形敷石住居であり、中央の方形石囲炉周辺に部分敷石を敷設した長さ三m程度の隅丸方形かと思われる。大庭遺跡（立科町、島田ほか一九九〇）は八ヶ岳北麓、蓼科山北斜面、芦田川左岸の小河岸段丘面に立地し、J一一号住は東向きの径四・二mの円形主体部をもつ非柄鏡形敷石住居で、奥壁寄りに炉、壁際に部分敷石があり、壁際に壁柱穴が巡る。花上寺遺跡（岡谷市、山田ほか一九九六）は諏訪湖南岸の北斜面の尾根端部に立地する。一七号住は東向きの非柄鏡形敷石住居で、径三・五mの円形主体部の奥壁側に方形石囲炉があり、一部縁石をもつ。柱穴は敷石周縁に四～五本の柱穴が認められ、中期後半の主柱穴配置をとどめる。

十三a期の事例には浅間山南麓に立地する滝沢遺跡（御代田町、小山ほか一九九七）がある。J一〇号住は南向きの非柄鏡形敷石住居で、主体部長三・八m、隅丸方形プランの全面敷石とみられ、方形石囲炉が中央にあり、柱穴は敷石外縁に五～六本存在し、対ピットをもつ。平石遺跡（望月町、福島一九八九）は蓼科山北東麓、八丁地川に面し

た河岸段丘面の緩やかな東傾斜面に立地する。二号住は南向きの柄鏡形敷石住居で、径三・五mの円形竪穴の主体部に二・四mの方形敷石を敷設し、周礫をとめない、中央やや手前に方形石囲炉、出入口部の埋甕周囲には石囲い状配石がある。吹付遺跡（佐久市、百瀬ほか一九九一）は香坂川流域の南向き緩斜面の凹地状地形にあり、中期後半から中期末の拠点集落である。四号住は南向きの柄鏡形敷石住居で、径五mの円形主体部の中央手前に炉体土器を伴う方形石囲炉があり、炉を中心に一辺二・七mの方形敷石がある。柱穴は敷石四隅に四本の主柱穴を配し、対ピットをもつ。

十三b期の事例には滝沢遺跡（前出）J八号住がある。三・九m程度の円形主体部の南向き非柄鏡形敷石住居で、中央に方形石囲炉をもち、柱穴は壁柱穴で対ピットを伴う。宮平遺跡（御代田町、堤ほか二〇〇〇）は八風山西北麓の久能沢川に面した尾根上にあり、J九号住は全面敷石の三mほどの円形主体部をもつ南向きの柄鏡形住居で、柄部に対ピットと思われる柱穴列が並列し、中央やや手前に方形石囲炉がある。郷土遺跡（前出）八三号住は柄鏡形敷石住居で、長さ三・七mの円形主体部には南西壁際を中心に部分敷石があり、柄部には敷石、石積みをもつ。柱穴は敷石外縁に五本程度もつとみられる。九三号住は南向きの柄鏡形敷石住居で、長さ三・九mの隅丸方形の主体部には中央手前に炉があり、壁際には部分的に縁石を並べ、柱穴は四隅に壁柱穴がある。一〇四号住は南向きの柄鏡形敷石住居で、長さ三・六mの円形主体部には東壁際を中心に部分敷石があり、中央手前に方形石囲炉がある。柱穴は壁柱穴で五本程度が円形に巡り、連結部には対ピットの位置に大形ピットがある。一二三号住は南向き、柄鏡形敷石住居で幅五・六mの円形主体部には壁際にわずかに縁石と部分敷石がある。炉は中央で、柱穴は壁柱穴が円形に巡る。吹付遺跡（前出）九号住は南東向きの柄鏡形敷石住居。主体部は径四・五mの円形で、中央やや手前に方形石囲炉があり、全面敷石とする。柱穴は敷石外周に壁柱穴が巡り、大小のピットが交互に計二十本ほど穿たれ、柱穴を結ぶ壁際には

小石を土石混合状にしたという周礫帯が巡る。また出入口部には連結した対ビットが存在する。

(二) 山梨県域 (図四〇六)

山梨県域は甲府盆地域、盆地北西部の八ヶ岳南麓域、富士北麓の郡内地域に大別されるが、水系別では甲府盆地内の釜無川(富士川)水系、笛吹川水系、郡内地域の桂川(相模川)水系、多摩川水系となる。釜無川水系は長野・静岡県域と連絡し、桂川・多摩川水系は西・南関東と直結する。

山梨県域で時期的に最も古い関連事例に宮の前遺跡(西桂町、奈良ほか一九九三)三号住がある。この遺跡は桂川水系の欄干川左岸、河岸段丘上の南緩斜面に立地する。十二b古期、あるいはそれ以前に遡る事例で、径四・五mの円形竪穴住居の南西向きに埋甕を伴う階段状の小張出をもつ。これを柄鏡形住居の祖形例の一類型とするか否かについては評価が分かれる。

十二b古く新期の敷石住居の事例は二例存在する。桂野遺跡(笛吹市、望月二〇〇四)は御坂山地北麓の北向き斜面の地形に立地する拠点集落で、いくつかの注目すべき初現的な敷石住居が検出されているが、そのうち一三号住は径四・五mの円形主体部内に径三・二mの円形敷石をもつ北向きの非柄鏡形敷石住居で、奥壁寄りに方形石囲炉がある。美通遺跡(都留市、笠原ほか二〇一一)は桂川右岸、支流に挟まれた段丘面上にある。一号住は径四mの円形プランで、炉体土器を伴う方形石囲炉が奥壁寄りにあり、炉から出入口付近にかけて部分敷石をもつ南向きの非柄鏡形敷石住居である。主軸側の敷石先端に小形方形の石囲い状配石があり、主柱穴四本および周溝を伴う。これらは全国的にみても最古級の敷石住居といえ、柄部を伴っていない。

十二b新期の事例には桂野遺跡三号竪穴がある(櫛原二〇〇四b)。主体部径三・五mの円形プラン、北向きの全面

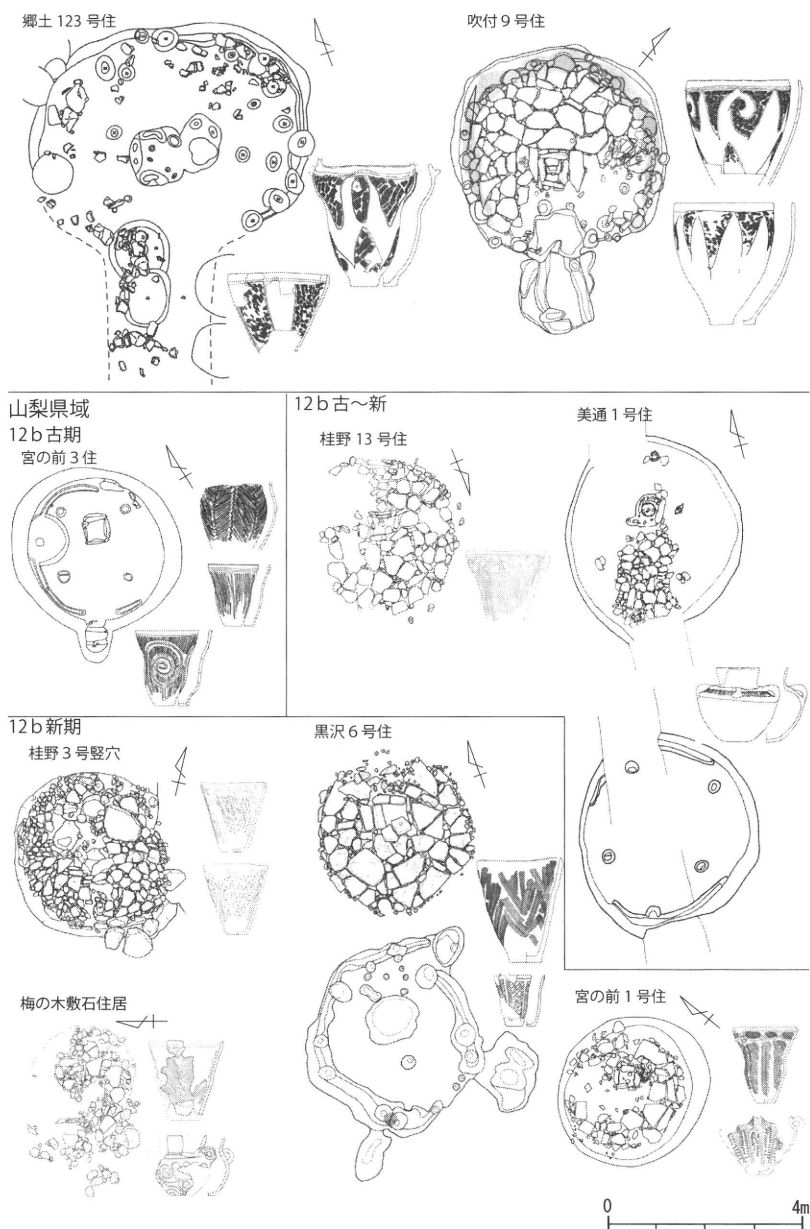


図4 甲信地域の柄鏡形敷石住居 長野県域 (3)・山梨県域 (1)

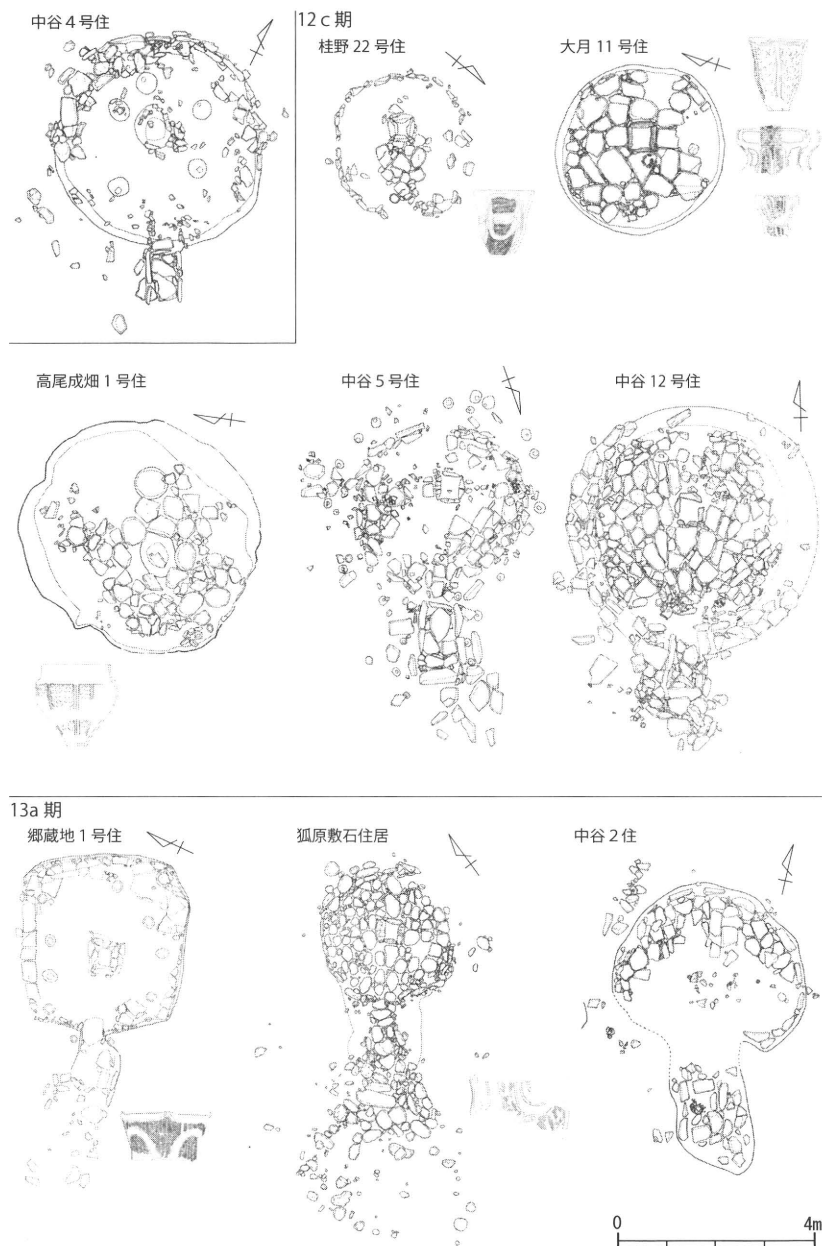


図5 甲信地域の柄鏡形敷石住居 山梨県域 (2)

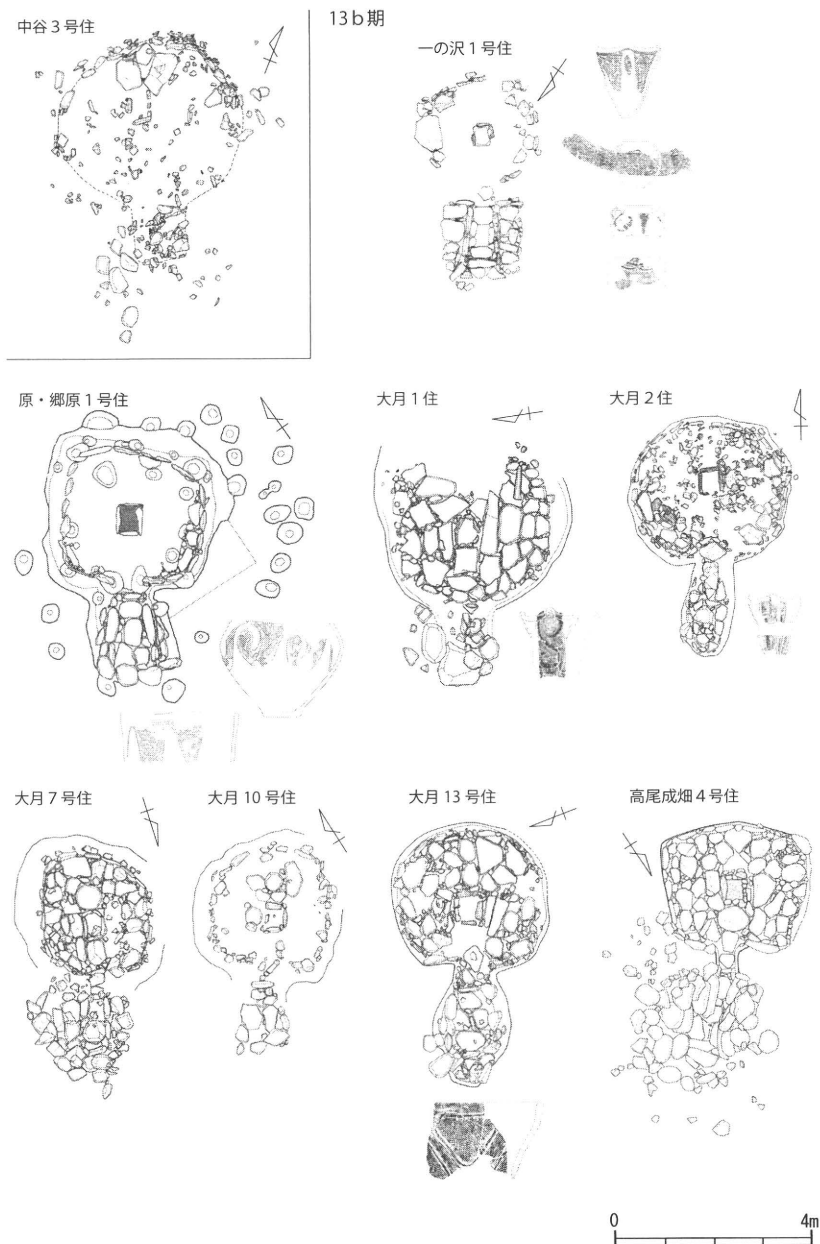


図6 甲信地域の柄鏡形敷石住居 山梨県域(3)

敷石とする非柄鏡形敷石住居で、炉は奥壁寄り、柱穴は埋甕両脇二本と奥壁一本の三本柱穴である。梅之木遺跡（北杜市、佐野二〇〇八）は茅ヶ岳西麓にある中期の大集落で、集落脇を西流する湯沢川に面した低位河床面に敷石住居がある。西向きの非柄鏡形敷石住居で、主体部は径三mほどの円形であり、奥壁寄りに方形石囲炉がある。黒沢遺跡（北杜市、坂口二〇〇五）は、釜無川河岸段丘面に面した南東傾斜の段丘上にある。六号住は長さ二・五mの逆五角形を呈した非柄鏡形、南向きの全面敷石で、外周には縁石、周礫をもち、方形石囲炉が奥壁寄りにある。主軸線左側の埋甕両脇に対ピットをもち、柱穴は敷石外縁の周溝中から小ピットが検出されている。宮の前遺跡（前出）一号住は直径三・一mの南西向き円形プランで、奥壁寄りに方形石囲炉をもつ。全面敷石とみられる非柄鏡形敷石住居で、外縁には縁石状の配置がある。中谷遺跡（都留市、長沢・笠原一九九六）は桂川支流の高川左岸、東向きの河岸段丘面にあり、柄鏡形敷石住居十二軒が環状配置を呈しているが、うち一・一一・一五号住の三軒が堀之内式期、九軒が中期末の敷石住居である。四号住は径四・四mの円形主体部に一×〇・六mの石棺状の短い柄部をもつ南向きの柄鏡形敷石住居で、主体部には縁石が巡り、左右から奥壁にかけて壁際に部分敷石をもつ。奥壁寄りに五角形炉とみられる石囲炉があり、主体部内に五本の主柱穴がある。このように甲府盆地以西を中心に、奥壁寄りに石囲炉をもつ非柄鏡形敷石住居が分布するなかで、桂川水系ではいち早く柄鏡形敷石住居が出現している。

十二c期では非柄鏡形敷石住居に桂野遺跡、大月遺跡、高尾成畑遺跡例がある。桂野遺跡（前出）二二号住例は主体部径二・八mの円形プランの縁石をもつ北向きの敷石住居で、奥壁寄りに方形石囲炉をもち、敷石は炉と埋甕の間の通路空間に敷設する。大月遺跡（大月市、長沢・笠原一九九七）は桂川に面した西傾斜の河岸段丘面に立地する。一一号住は径三mの円形主体部に全面敷石を施す敷石住居で、炉は中央奥壁寄りに方形石囲炉がある。高尾成畑遺跡（丹波山村、十菱二〇〇五）は、多摩川上流の丹波川に北面した河岸段丘面上の遺跡で、北向き緩斜面にある。一号住

は西向きの敷石住居で、径四mの円形プランの竪穴内に敷石がみられる。炉は奥壁寄りで、石囲埋甕炉とされる。中谷遺跡五号住は、径三・六mの円形主体部をもつ北向きの柄鏡形敷石住居で、円形の縁石の左右空間に部分敷石、奥壁寄りに方形石囲炉、縁石外周に小形の壁柱穴がある。また柄部には一・三×〇・七mの石棺状配石があり、周囲に配石をもつ。一二号住は径五mの円形主体部の柄鏡形敷石住居で、奥壁寄りに方形石囲炉があり、縁石をもつ。全面敷石で、縁石外周にも敷石を敷設し、柄部には一・一×〇・六mの石棺状配石がある。

十三a期には郷藏地遺跡、狐原遺跡、中谷遺跡例がある。郷藏地遺跡（北杜市、田代一九八七）は塩川左岸、北向きの低位河岸段丘面に立地し、一号住は長さ三mの隅丸方形主体部をもつ西向きの柄鏡形敷石住居で、壁際に部分敷石、中央やや手前に方形石囲炉がある。狐原遺跡（上野原市、小西二〇一五）は相模川左岸の緩やかな南西傾斜のある河岸段丘面に位置し、中期後半までの集落より一段低い面に一軒のみ南西向き柄鏡形敷石住居が検出されている。主体部は径三mの円形で、ほぼ中央に方形石囲炉があり、縁石をもつ。柄部先端には階段状の礫を配し、両脇に立石を立て、さらに外側には扇形に開く敷石面がある。中谷遺跡（前出）二号住は径三・九mの円形主体部をもつ南向きの柄鏡形敷石住居で、炉は中央やや手前に石囲炉があり、縁石を巡らし、奥壁左右に部分敷石を敷設し、柄部には〇・七×〇・五mの長方形配石をもつ。3号住は径三・八mの円形主体部に短い柄部をもつ南向きの柄鏡形敷石住居で、主体部には縁石が巡り、さらに周礫を配している。炉は奥壁寄りに方形石囲炉があり、炉と奥壁間に部分的な敷石を敷設する。

十三b期は柄鏡形敷石住居が増加する時期である。一の沢遺跡（笛吹市、古谷一九八九）は御坂山地北麓の北斜面上に立地し、一号住は主体部径二・五mの円形プランに柄部をもつ北向きの柄鏡形敷石住居である。主体部中央に方形石囲炉があり、縁石、左右を中心とした部分敷石を敷設し、柄部には長さ〇・七mの石棺状配石をもつ。原・郷原

遺跡（上野原市、小西二〇〇〇）は山間部の鶴川に面した南西傾斜の河岸段丘面に立地する。一号住は南西向き柄鏡形敷石住居で、長軸二・九mの隅丸方形の主体部には縁石を巡らし、一部壁際に敷石をもつ。柄部は石棺状の敷石をもち、先端部には配石隅に立石と埋甕がある。炉は中央に方形石囲炉があり、主体部四隅の壁柱穴四本と対ビットがある。大月遺跡（前出）一号住は西向きの柄鏡形敷石住居で、径四mの円形主体部は全面敷石とみられ、中央手前に五角形の石囲炉がある。二号住は南向きの柄鏡形敷石住居で、径三・三mの円形主体部には縁石を巡らし、左右の壁際には部分敷石があり、中央やや奥壁寄りに方形石囲炉がある。七号住は北向きの柄鏡形敷石住居で、径三mの円形主体部に同規模の柄部をもつ。主体部は縁石を巡らした全面敷石で、中央やや前方に五角形石囲炉をもち、柄部は一m×〇・五m程度の石棺状石組周辺に配石をもつ。一〇号住は南向きの柄鏡形敷石住居で、径三mの円形主体部内に円形の縁石を巡らし、中央やや手前に方形石囲炉を設け、炉の背後に部分敷石をもち、柄部に敷石がある。一三号住は径三・二mの円形主体部をもつ西向きの柄鏡形敷石住居で、中央やや手前に方形石囲炉をもち、ほぼ全面を敷石とし、柄部には楕円形の石棺状配石がある。高尾成畑遺跡（前出）四号住は斜面下方の北東向きに柄部があり、主体部は五角形で、柄部には立石状の棒状礫を側壁に多数積み重ね、方形石囲炉を主体部中央にもつ。

Ⅳ 柄鏡形敷石住居の出現

甲信地域の中期末、柄鏡形敷石住居として取りあげた事例は四十九例で、時期別には新地平十二b古く新期一二例（桂野一三、美通一）、十二b新期一十二例（屋代五三一八・五三二五・五三三六・六七〇二、幅田Ⅱ、大庭六、梅之本、黒沢六、桂野三、宮の前一、中谷四・一二）、十二c期一十三例（屋代五三一七・五三二一・五三三六・五三三

八、郷土七〇、大庭一一、花上寺一七、桂野二二、中谷五・九・一〇、大月一一、高尾成畑二、十三a期一十一例（屋代五三二九・五三三四・五三三七、滝沢一〇、平石二、吹付四、大庭五、郷藏地一、狐原、中谷二・三）、十三b期一十四例（滝沢八、宮平九、郷土八三・九三・一〇四・一二三、吹付九、一の沢一、原・郷原、大月一・二・七・一〇・一三、高尾成畑四）となる。十二b古く新期に桂川・笛吹川水系に非柄鏡形敷石住居が出現、十二b新期には柄鏡形が千曲川水系と桂川水系で出現し、以後、非柄鏡形敷石住居を中心としながら次第に柄鏡形敷石住居が甲信地域に定着、展開する。

形態的には次のように変遷する。十二b古く新期は二例のみだが、ともに竪穴系、非柄鏡形敷石住居である。いずれも奥壁寄りに炬をもち、桂野一三号住では全面敷石、美通一号住は出入口側のみの部分敷石であり、甲信地域では非柄鏡形敷石住居が柄鏡形住居に先行して出現したことが指摘できる。両遺跡の位置は桂川水系および富士北麓寄りの甲府盆地南側であり、この地域に敷石出現に関わる何らかの要因があったとみられる。桂野一三号住例では、住居の主軸方向が傾斜下方向の北側を示し、敷石住居と傾斜面立地との相関性を示している。

十二b新期は非柄鏡形が十二例中七例で、山梨県域を中心に奥壁寄りに炬をもつ竪穴系、全面敷石の敷石住居が目立つ。従来型の竪穴住居の上屋構造を維持しつつ敷石を導入した竪穴系の敷石住居である。そうしたなかで柄鏡形には屋代遺跡群SB五三一八・五三二五・五三三六・六七〇二、中谷遺跡四号住の五例があり、千曲川水系の屋代遺跡群および桂川水系の中谷遺跡でいちはやく柄鏡形が登場する。屋代遺跡群SB五三二五例では有段式の主体部中央に炬を配し、対ピットをもつ柄鏡形敷石住居で、在地型の竪穴住居との融合をみせた独自性をもつものであり、中谷遺跡例とは主体部の構造に共通点がみられないことから、中谷遺跡との情報交換は認めがたい。また中谷遺跡四号住は主柱穴配置の竪穴系、柄鏡形敷石住居で、柄部に短い配石を敷設した形をとり、その後の定形的な柄鏡形敷石住居と

比べると柄鏡形の初現的な姿と理解できる。中谷四号住の意義としては、相模川上流、桂川水系の加曾利E式土器分布圏に直結する地域での柄鏡形の初現例であり、加曾利E式土器の強い影響下での出現を考えざるをえない。

十二c期では十三例中八例と、引き続き非柄鏡形が主だが、屋代遺跡で逆五角形の主体部に柄をもつ地域的な柄鏡形敷石住居があるほか、中谷五・九・一二号住は柄鏡形敷石住居で、五・一二号住では柄部に石棺状配石があり、主体部には縁石をもつなど、柄鏡形敷石住居としての要素が出揃っている。ただし、その分布圏は山梨県域では富士北麓にとどまっていて、甲府盆地以西には及んでいないことから、曾利式土器の影響力の強い地域には普及していない状況を指摘できる。炉は屋代遺跡群、郷土遺跡七〇号住が主体部中央であるのに対して、山梨県→長野県佐久地域、諏訪湖盆地域の敷石住居では奥壁寄りのままの竪穴系敷石住居である。

十三a期は十二例中、柄鏡形が十例、非柄鏡形が二例のみと比率が逆転して柄鏡形が主体となり、この段階で柄鏡形敷石住居が普及をみたといえる。この時期は曾利式土器が衰退し、加曾利E4式土器が主体となる時期で、加曾利E式土器とともに柄鏡形住居が甲信地域に波及する様相を示し、土器と住居形態の連動性が認められる。炉は中央が三例、中央手前が七例で、中央から手前に寄る傾向があり、上屋構造も連動して変化をみせたと考えられる。

十三b期は十三例中、一例を除き柄鏡形敷石住居で、炉は手前側が七例、中央が五例と前段階に引き続き中央から手前が多い。柱穴はすべて壁柱穴となり、対ピットを伴う。柄部に石棺状配石を持つ例が山梨県域に四例あり、地域的な特徴といえる。

集落立地は、河川に面した段丘面や斜面の立地例が一般的で、北斜面に立地する桂野遺跡では主軸方向を北に向けた敷石住居が十二b古期に出現することから、敷石住居の出現段階の当初から斜面の向きに合わせた住居の主軸設定が行われたことがわかる。柄鏡形が波及する以前に敷石住居と斜面立地との関連性の強さを示した事例といえる。ま

た、その直後に出現する柄鏡形はやはり斜面下方を柄部が向くことから、敷石住居から柄鏡形敷石住居への主軸方向の点での系譜性が認められ、この傾向は後期柄鏡形敷石住居へと引き継がれていく。主軸方向を斜面下方に向けるという現象は、敷石面が浅い掘り込みとなっていく傾向と対応することから、雨水への対策と考えられるが、これが従来指摘されている気候の湿潤冷涼化とどう結びつくのか謎である。柄鏡形で壁柱穴を採用した柄鏡形敷石住居では、寒冷化対策として二重壁と出入口を細長くすることで外気を直接室内に入れない工夫がなされていたとみる向きがあるが（小林一九八一）、寒冷対策としては竪穴床面をより深くすることで対応が可能となると考えられることから、逆に床面が浅くなっていく現象に対して説明が難しく、立地の変化にとまなう雨水への対策であったと推測できる。敷石の敷設に関しても室内への浸透水対策であった可能性がある。ただ、甲信地域の一部でなぜ敷石風習が始まったのか、という点に関しては何ら答えを見出すことができておらず、それが急速に広まったのも不可解な現象といわざるをえない。

V おわりに

本稿では甲信地域の中期末における柄鏡形敷石住居の出現について、新地平編年を用い時間的な変遷過程を検討したところ、竪穴住居内に敷石を敷設した竪穴系の敷石住居が桂川上流から甲府盆地側で出現し、敷石住居が柄鏡形敷石住居に先行することがわかった。非柄鏡形敷石住居出現に引き続いて柄鏡形敷石住居がいち早く桂川水系で登場するが、これは加曾利E式土器圈の影響によるものと考えられ、曾利式が強い影響力を維持していた十二c期（曾利Va式期）までは甲府盆地側に柄鏡形敷石住居は波及していない。甲府盆地側では非柄鏡系敷石住居で炉を奥壁側に設

けるなど、竪穴系の敷石住居が維持されていたが、十三a期以降、曾利式土器が急速に衰退すると同時に柄鏡形敷石住居が甲府盆地内にも普及していった様子がうかがえる。このことから柄鏡形は加曾利E式土器圏の居住形態と推定できるが、奥壁側にあった炉が主体部中央から手前に移動することから、上屋の構造自体が柄鏡形の影響下のもとで変化したとみられ、壁柱穴への急速な移行はそうした流れとみることができよう。

註

(1) 柄部における石組遺構に関しては石棺墓に類似するが、甲信地域で堀之内2・加曾利B式期に出現する石棺墓とは時期的な相違があり、無関係とみられる(櫛原二〇一七)。

(2) 曾利式について、本稿では櫛原編年(二〇〇八)を用いるが、曾利Ⅲ・Ⅳ式の細分案に今福・関間(二〇〇四)の異論があり、見解の一致をみていない。多摩地域を対象とした新地平編年で加曾利E式、曾利式の併行関係が整理されていることから、山梨側の曾利編年を対応させることができるが、地域性を考慮する必要がある。また曾利式・加曾利E式・唐草文土器の三者間の併行関係については拙稿がある(二〇一四)。

引用文献

石井 寛 一九九八「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展

開に関する一考察」「縄文時代」級、縄文時代文化研究会、二九～五六頁

小林公明 一九八一「後期縄文文化における沿北太平洋的要素とメソアメリカ要素」「どるめん」二九 二七～五二頁

笠原みゆき 一九九九「山梨県東部地域の敷石住居の様相」

『山梨考古学論集』Ⅳ 山梨県考古学協会 一九七～二〇

八頁

笠原みゆき 二〇〇一「敷石住居」『山梨県考古学協会誌』一

二 山梨県考古学協会 四二～四五頁

笠原みゆきほか 二〇一一「美通遺跡B区」山梨県教育委員

会ほか

櫛原功一 一九九五「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』六 帝京大学山梨文化財研究所

一～四〇頁

櫛原功一 一九九九「縄文時代の住居と集落」『山梨県史 資

料編二 原始・古代二』山梨県 四七三～五〇九頁

櫛原功一 二〇〇四a「敷石住居の発生―柄のない敷石住居

の存在―」『山梨考古学論集V 山梨県考古学協会二五周年記念論文集』山梨県考古学協会、三七～五一頁

櫛原功一 二〇〇四b『桂野遺跡』山梨文化財研究所ほか

櫛原功一 二〇〇八『曾利式土器』『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 四二六～四三五頁

櫛原功一 二〇一四『曾利式土器編年の再検討』『山梨考古学論集Ⅶ』山梨県考古学協会、六三～九八頁

櫛原功一 二〇一七「中部地方における配石墓・石棺墓の出現と展開」『考古学ジャーナル』七〇二 ニューサイエンス

社、二二～二六頁

小西直樹 二〇〇〇『原・郷原遺跡』上野原町教育委員会

小西直樹 二〇一五『狐原遺跡』上野原市教育委員会

小林謙一・中山真治・黒尾和久 二〇〇四「多摩丘陵・武蔵

野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『縄文集落研究の新天地平三―勝坂から曾利へ―』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会、三～三〇頁

小山岳夫ほか 一九九七『滝沢遺跡』御代田町教育委員会

坂口広太 二〇〇五『黒沢遺跡 第一・二次調査』北杜市教育委員会

桜井秀雄ほか 二〇〇〇『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一九―小諸市内三―郷土遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センターほか

佐野隆 二〇〇三「縄文時代中期の住居内配石について―敷

石住居発生以前の住居内祭祀施設の様相―」『山梨県考古学協会誌』一四 山梨県考古学協会、一三～二四

佐野隆 二〇〇八『梅之木遺跡Ⅶ』北杜市教育委員会

島田恵子ほか 一九九〇『大庭遺跡』立科町教育委員会

十菱駿武 二〇〇五『高尾成畑遺跡』丹波山村教育委員会

末木健 二〇〇六「環礫方形配石遺構の復元について―塩瀬下原遺跡敷石住居から―」『研究紀要』二二 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター、一一～二五頁

田代孝 一九八七『郷藏地遺跡』山梨県教育委員会ほか

堤隆ほか 二〇〇〇『宮平遺跡』御代田町教育委員会

長沢宏昌・笠原みゆき 一九九六『中谷遺跡』山梨県教育委員会

長沢宏昌・笠原みゆき 一九九七『大月遺跡』山梨県教育委員会

奈良泰史ほか 一九九三『宮の前遺跡発掘調査報告』西桂町教育委員会

福島邦男 一九八九『平石遺跡』望月町教育委員会

古谷健一郎 一九八九『一の沢・金山遺跡』境川村教育委員会

水沢教子ほか 二〇〇〇『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調

査報告書二四―更埴市内その三―更埴条里遺跡・屋代遺跡
群―縄文時代編―長野県埋蔵文化財センター

水沢教子 二〇〇二「千曲川水系における柄鏡形敷石住居の

成立―長野県更埴市屋代遺跡群の研究その一―『長野県
の考古学Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター、六五―九二頁

村田文夫 一九七五「柄鏡形住居址考」『古代文化』二七―一

一、六五九―六九二頁

望月和幸 二〇〇四『桂野遺跡』御坂町教育委員会

本橋恵美子 一九九五「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生

について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』六 帝京

大学山梨文化財研究所、四一―六八頁

本橋恵美子 二〇〇〇「浅間山麓の敷石住居址」『宮平遺跡』

御代田町教育委員会、一七九―一八六頁

本橋恵美子 二〇〇三「縄文時代中期後葉の住居構造の分析

―浅間山麓周辺における柄鏡形敷石住居の発生について

―』『長野県考古学会誌』一〇三・一〇四 長野県考古学

会、五九―八八頁

百瀬忠幸ほか 一九九一『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調

査報告書2―佐久市内その2―吹付遺跡ほか』長野県埋

蔵文化財センターほか

森嶋稔 一九八二「幅田遺跡」『長野県史 考古資料編 全一

巻 主要遺跡（北・東信）』長野県、一二九―一四〇頁

山田武文ほか 一九九六「花上寺遺跡」岡谷市教育委員会

山本暉久 一九七六「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』

二八―二・三、六三―九九頁、一三一―一五九頁

山本暉久 一九八二「住居跡の構造と分布」『日本歴史地図

（原始・古代編（上）』柏書房、一二六頁

山本暉久 一九九九「敷石住居」『縄文時代』一〇 第三分冊

縄文時代文化研究会、一一三―一三〇頁

山本暉久 二〇〇二「敷石住居址の研究」六一書房

山本暉久 二〇〇八「柄鏡形（敷石）住居址の地域的展開

（一）―相模川上流域の事例から―』『縄文時代』一九 縄

文時代文化研究会、三九―七八頁

山本暉久 二〇一〇「柄鏡形（敷石）住居と縄文社会」六一

書房